

はくさん

第5巻 第1号

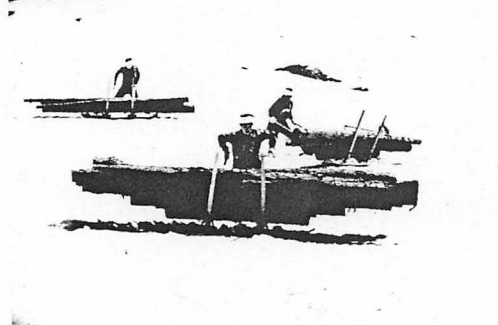


東二口文弥人形浄瑠璃

この文弥人形浄瑠璃は、尾口村東二口におよそ300年前より伝えられているでくまわしの一
種です。この人形浄瑠璃は京都より伝えられたとされ、大正の頃までムラでお目出たいことの
あった家を、若連中が借りうけ、上演したそうですが、昭和25年以降は、ムラの善財道場（浄
念坊）が会場となっています。明治の中頃までは、出し物（上演種目）も47～8種を数えまし
たが、過疎化現象によりムラの世帯数が減少するにつれ、文弥人形も上演するのが困難となり、
現在は「源氏烏帽子折」「出世景清」「門出屋鳴」「大職冠」「姫山姥」「酒吞童子」など6種の演
目を残すだけとなっています。太鼓、三味線、笛などの囃しにあわせ太夫の語る浄瑠璃でまわ
す人形は、現在33体保存されていますが、保存会の人々によって行なわれるこのでくまわしは
とても古風でもあり、また新しいリズム感覚をもそなえていて、老若男女みる人々を楽しませ
てくれます。

〈高桑 守〉

手ぞり作業の写真撮影



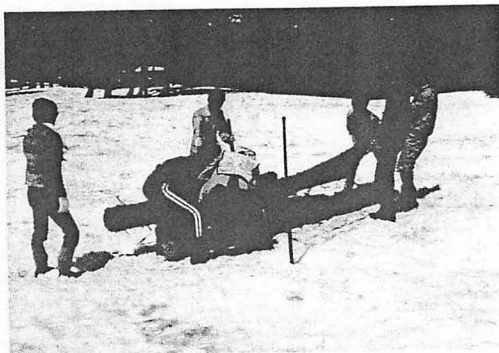
今春、センターでは、白峰村役場の協力を得て、手ぞりによる木材搬出作業のようすを写真記録することができました。

白山麓は豪雪地域ですが、この雪を最大限に利用した手ぞりは、森林施業が機械化された現在でもよく利用されています。慣れた人だと一度に4石もの材を乗せて操ることができるのだそうです。

センターのホールに手ぞりが展示されていますが、今度撮影できた写真を背景に使って、山の生活の一端を紹介することにしました。ご期待ください。



手ぞりの組み立て



材木を手ぞりにのせる



手ぞりの移動



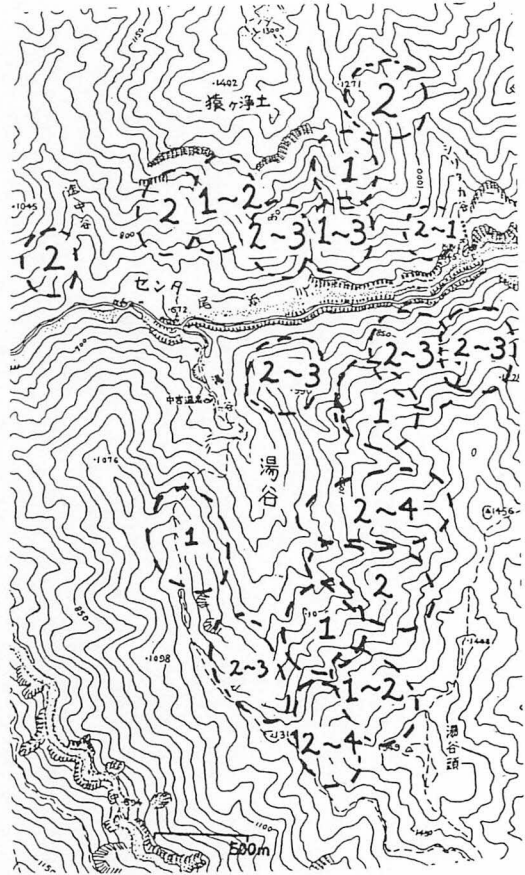
撮影スタート

自然保護センター周辺のニホンカモシカ

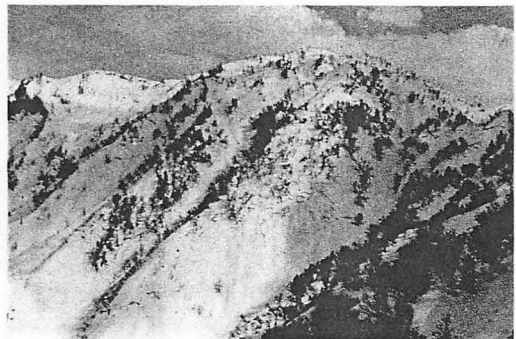
桜井道夫

白山に来て初めてニホンカモシカに出会ったのは1972年2月のことであった。この時見た3頭づれのおかげで、それ以後現在に到るまでの私のカモシカ調査が続いている。私が白山において初めて見、それによってカモシカの調査をしようときめた、記念すべきカモシカたちのうちの2頭が、北国新聞刊の『のとかが野生の四季』にのっている。

白山蛇谷は岩盤が露出する所が多く、急斜面となっていて尾根へのとりつきはどこから登ろうとしても難かしく、容易なことでは歩きつつ調査を進めるわけにはいかない。当初、私は調査の困難さを考えて、白峰村桑島の大嵐・小風谷付近をフィールドにしようとして歩き回ったが、ここも歩きづらいことは同様であり、しかも見通しの悪い場所がほとんどであった。歩いているうちに不意にカモシカに出会うことはあっても、ほんの一瞬しか見られず、行動観察・個体識別どころではなかった。そこで主として積雪期に調査を行なうようにした。調査地は、当時の白山調査のいきさつによって中宮温泉周辺に落ちついた。そして歩き回ることあまりしないで、観察する地点を決め、じっと対斜面とか自分の周囲を見つづける調査方法をとった。1973年から毎年2～3月に1ヶ月ほどセンターにこもったりしながら調査を続け、今年(1977年)で5年目になる。



センター周辺のカモシカの分布



2月の湯谷の景観(湯谷頭)

前ページの図は中宮温泉付近でみられた、おおよそのカモシカの分布と頭数である。図に示してある数は時間的に変動することをあらわしている。この他に単独個体の“流れもの”みたいなカモシカが加わる。一応破線で示してみた行動圏は5年間の印象によって描いたもので、かなりいいかげんである。もちろん破線で囲った内部のカモシカがその範囲を越えてでることもあるし、こんな線を引きけるのは破線内部のカモシカのうち親仔の2頭か、単独個体の1頭であって、他は明確に線引きはできない。図に示した範囲の他によくカモシカの見られる場所としては、三ッ又の手前オオノマの大きなナバタがある。スーパー林道ぞいの斜面でもしばしば見ることができる。

手軽に行けてしかも観察しやすいのは雪どけの春である。年によって異なるがだいたい5月初旬といったところが最もよい時期である。最も手近に見ることができるカモシカは、遊歩道の向かい斜面である。ナダレ柵のあるところは樹木がなく姿を認めることは容易である。注意していると一日のうちで2〜3頭あらわれてくれるから、カモシカを見

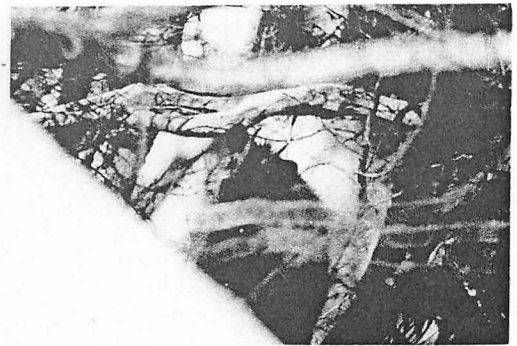
たい人は、双眼鏡をもってがんばって下さってもよいだろう。また林道を車で素通りなんてことはせずに、じっくり見て歩いても期待はずれにはまず終わりはしない。

スーパー林道に一般車が頻発に通るとなる、カモシカがどんな反応を示すだろうか。まさかカモシカが交通事故に会うことはないだろうが、林道のそばには現われなくなるかも知れない。また生息密度がどんどん高くなってくると、将来交通事故が起きないとも限らない。

白山のカモシカは他地方のものに比べて、憶病らしい。人訓れをさせて、私の姿が彼らの目にとまることがあってもそれを彼らが無視し、あたかも私が自然の一部であるかのようにみなすようにさせようとしても、なかなかうまくいかない。すぐ近くで出喰したとき、私の姿を認めるとじっとこちらを見て微動だにしない。ところが私がちょっと位置を変えると、たちまちシューと言って逃げてしまう。カモシカがじっと私を見るということがすでに、カモシカが警戒態勢に入っているという異常事態になってしまっている。私の方がまづいことをやっているのか、それとも過去に



ジライ谷のカモシカ



温泉山のカモシカ



遊歩道向かいのカモシカ

人間によっていためつけられてきたためであらうか。秋田の太平山のカモシカは人の姿があっても知らんぷりとのこと。うらやましい限りだ。

調査に来ていて、白峰のスキー場に度々あらわれるカモシカの話は聞いたが、民家のすぐ近くにカモシカがあらわれたという話はいまだ聞かない。岐阜とか青森・秋田では、人間との接触が頻繁になり、加害の問題までもち上がっている。もっとも加害の事件の方は、それが起きた地域の特殊条件によっているようだ。

調査ルートのひとつに、湯谷を観察するために中宮道を歩くというのを行なっている。積雪期は登山道とはとりつきが違っているが、尾根に出たからはほぼ同じである。中宮道から湯谷を見おろしたり、キリバレとか湯谷頭の斜面を見たりするわけで、これには一点に腰をおちつけて観察する方法も含まれている。腰をおちつける地点は、後下方に岩間温泉が見える、リンズと言われている所の尾根上の岩場である。冬にはここに盛り上って雪庇状になった雪がついていて、広い範囲を見渡すことができる。樹々の葉が繁る季節で

も、カモシカが木がなくて草の生えている斜面にでて来れば姿を見ることができる。ただしかなりの観察眼がいる。

湯谷の観察で、1日のうちで発見した頭数は年々増加し、1973～1975年は10頭をこえることはなかったが、1977年は最高16頭を数えた。この頭数すべてが湯谷にすみついているとはいえないが、その日前後には16頭以上のカモシカがいたことは確かである。湯谷の観察面積は150ヘクタールほどであるから。密度にすると1km²当り10.8頭という値となり、300m四方に1頭という勘定になる。今までに報告されたカモシカの密度算出よりもはるかに高い。シカ類では1km²当り5頭をこえる密度になると林が荒れてくるという話から考えると非常に高密度であるといえよう。しかし、カモシカのご飯となる植物の量について何の資料もない現在、これが異常事態であるとも言い得ない。

カモシカにとっての有力な天敵がおらず、カモシカ自身での産仔数の調節がおこらないとすると、これからも頭数は増加して行き、しかも開発によって生息域がせばめられている状態では、密度はますます高まっていくことになるだろう。白山でも将来、何らかの問題が生じてくるかも知れない。カモシカの生態を調べているものにとっては興味は湧こうというものではあるが、さてカモシカの未来はどうなっていくのであろうか。

〈京都大学理学部〉

首が無くなった観音様

石野春夫

尾口村字尾添部落にある安正観音様は昔、昔、外国で作られた金銅仏で、白金が沢山含まれている古い古い仏様です。

この観音様は100年程前までは尾添部落から1里程、白山の山の中へ入った所にあった白山寺というお寺にお祭りしてあったのですが、明治2年に大政官から出された神仏分離令によって明治7年7月に白山寺が破壊されたときに尾添へ移されて、部落で白山下山仏として大切にお守りしている仏像の一つです。

この観音様の首から上に何かで、なぐったような傷が今でも残っていますが、この傷は飛驒の国のおばばが、こわそうとしたときについた傷だと言われています。

昔、昔、飛驒の国のあまり心の良くない三人の男が白山寺へやって来て誰もいないお寺の中に幾つかお祭りしてある仏像の中でも、木造の仏像と異って金銅仏で形の変っているこの観音様に目をつけて盗もうとしましたが、どうしても動かすことが出来ないで背負ってみました。ところが、小豆二俵分程の重さがあって運び出すことが出来ず、あきらめて飛驒の国へと帰りました。

この男はあきらめきれず、友達のおばばにこの立派な観音様のことを話しますと、このおばばも欲の深い人でしたから、「仏様というものは不浄なものがきらいだから、うらが盗ってくる」と言っではるばる白山寺まで

やって来ました。おばばは誰もいないことをたしかめてこの観音様を自分が腰に巻いて来た汚い腰巻をほどいて包んで、難なく軽々と盗み出してしまいました。しかし遠い飛驒の国まで持って行くには人に出合うこともあり盗んだことが判るので、早く金の塊にして観音様だということを判らなくしようと考えて、大きな焚火をして観音様を溶かそうとしましたが少しも溶けません。仕方がないので溶かすことをあきらめて今度は大きな金槌でたたきつぶそうとして力いっぱいなぐったところ、「グーン」「グツ、ツ、ツーン」と白山の頂上までもひびくような大きな音がして首がはづれてどこかへ飛んで行ってしまいました。

あんまり大きな音がして近くに居た人達がお寺へ馳けつけてくる気配がしたので、おばばはびっくりして、そのまま飛驒の国へと逃げ帰ってしまいました。

お寺へ馳けつけて来た尾添の人達は大切な観音様の首が無くなっているのにびっくりして、八方手をつくして首の行方を探しましたが発見することが出来ませんでした。あきらめた村人達はそのまま首の無い観音様をお祭りしておきました。

こんなことがあってから40年程も過ぎてからこのお寺の屋根の総ふき替えを行うことになりました。尾添の人達が総出で古い屋根の茅を取除いていたところ、腐った古い茅の中

から観音様の首が出て来たのです。さー、村人達は大喜びです。早速、遠い遠い京都まで、首をつなぐ修理に出したのです。

どのような方法で修理されたものか、どの位の期間、費用がかかったものかは判りませんが再び完全な形になり白山寺へと戻ったのです。

第二次世界大戦が終って世の中も落ちつきを取戻して来た昭和20年代に尾添には国宝級のものが沢山あるので国宝や、重要文化財の指定を受けるようにと、申請を出したらどうかという話が持ち上ったことがありました。国宝や重要文化財に指定されたら管理が大変だということで断って、ただ1つだけ、この

観音様をと申請したところ鑑定人が鑑定して、この観音様は首の上と下とで白金の含有量が異っていて製作年代にずれがあるということで国宝にも重文にも指定されなかったそうです。それでも尾添の人達はこの観音様を大切にお守りしているのです。

さてこの観音様を盗もうとした男と盗み出したおばばはその後どうなったかという、その年の秋に大きな風が吹いたことがありました。男は風のために吹き折れた木の枝に打れて死んだということです。なお、おばばはその次の年、大きな地震があったとき、つぶれた家の下敷きになって死んだそうです。

（話 川田 婦美子）
鶴尾 健治
『能美郡誌』

〈石川郡鶴来町〉



（イラスト 石川太郎）

別山の「ニッコウイモリ」

宮崎 光二

すこし古い話になるが、20年ばかり前に県の図書館におられた長崎幸雄氏の書かれた小冊子「白山」には、「別山室堂平にある御手洗池には、にっこういもりが棲息し」とあり、その後北国新聞社から出た「白山」でも（多分さきの記載によったものであろうが）、「イモリはふもとの池堀に産し、ニッコウイモリが別山室堂平の御手洗池にいることも伝えられている。」とあって、別山には平地のものとは違う特別なイモリがいるように思われた読者も少なくないようである。

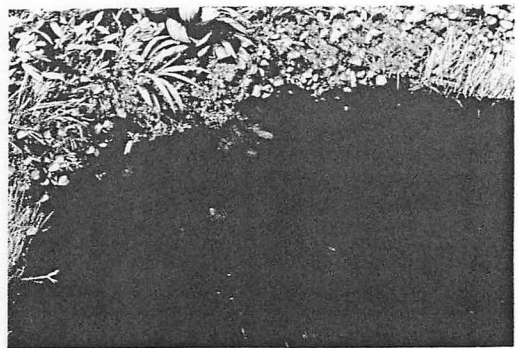
この「ニッコウイモリ」なるものの実体はクロサンショウウオなのであるが、両書とも白山にはクロサンショウウオがいることはちゃんと記してありながら、ニッコウイモリ云々と何のことわりもなしに書いてあるものだから、ニッコウイモリがクロサンショウウオと同じものであることがわからないのも当然であろう。

白山に「ニッコウイモリ」がいることを述べた最も古いものとしては、旧金沢二中の加藤賢三教諭が明治44年(1911)に刊行された「白山」をあげることができよう。これには「余曾て畜生谷の雪消の水溜に於て日光ゐもり(*Hynobius* sp.)の卵塊を抱き居れるを捕へたることあり、……日光ゐもりは両棲類の有尾類に属し、普通のゐもりと異なる点は稍大形にして、全身灰白色背部稍黒みを帯べども普通のゐもりの如く腹面赤からず、通常山地の湖沼に棲み、綿の如きものの中に黒色の卵粒数十を包める卵塊の上に横はる、之を捕ふるに際しても殆んど遁逃することなし。」と記されており、これがクロサンショウウオであることは明らかである。

しかし白山にクロサンショウウオが棲息していることを最初に記録したのは旧第四高等学校の市村塘教授で、明治30年(1897)のことである。市村教授は、「白嶽中別山頂上飛弾室堂附近の溜池には、数十疋の親ヒノビウスの住めるを見たり」(動物学雑誌、9巻、1897年)と記し、これはわが国における有尾類の分布に関する報告としては古いものの一つである。

この当時はまだクロサンショウウオの学名は明確ではなく、*Hynobius nigrescens* という学名は明治40年(1907)になって、アメリカの国立博物館の爬虫両生類研究部長であったL. STEJNEGER氏によって命名されたものである。だが日光にクロサンショウウオがいることはかなり早くから知られており、明治24年(1891)には池田作次郎氏が、「日光産さんせうを、卵並ニ産卵期」(動物学雑誌、3巻、1891年)について報告しておられる。

このようにクロサンショウウオの研究は日光産のものから始まったので、「日光サンセウウオ」という最初の和名が田子勝弥氏によって与えられた(明治40年)(動物学雑誌、19巻、1907年)。その後昭和4年(1929)になって、田子氏はこれを「日光霞山椒魚」と改称されたが(動物学雑誌、41巻、1929年)この和名はどちらも現在ほとんど用いられておらず、周知のように「クロサンショウウオ」が一般に使われている。クロサンショウウオという和名は、学名の *nigrescens* (黒いものという意味)にもとづくもので、大正11年(1922)に阿部余四男氏が既に用いておられる(動物学雑誌、34巻、1922年)。和名の場合には学名のように厳密な先取権の規定がないから、クロサンショウウオという呼び方が有効かどうかというような厄介な問題は起らなかったわけであるが、それはさておき「ニッコウイモリ」というややこしい和名をつけられたのは一体どなたであったらうか、私は寡聞にして知らない。〈石川県教育委員会〉



クロサンショウウオの卵塊 (加賀室跡)

ナマハゲのことも 一海の信仰から山の信仰へ一

高 桑 守

男鹿半島のナマハゲ行事は、今や冬の観光風物詩としてあまりに有名である。異様な鬼の仮面をつけ、蓑笠で身をおおい、さらに手には出刃包丁をもち、「ウォー、ウォー」とまわりを威嚇しながら、各家を廻り歩く。人々は、これを迎え、もてなし、異形の訪れ者から、本年の農耕の豊穡を約束してもらう。

雪にとじ込められた東北地方の村人の遠い春をまつ素朴な民俗行事である。このナマハゲの呼称は、冬の間、野良にも出られず、いろりにあたってからだを動かさずにいる人につく火ダコ（ナモミ）をはぎとるという意味から来ているらしいが、そういう意味では、能登半島のアマミハギも同様である。

ところで、このナマハゲは、先にも述べたように蓑笠をつけ鬼面を被むるという仮装のスタイルをとり、これは等しく日本において神が人間の前に姿を現わす常とう手段であったところから、ナマハゲは、やはり、神の姿を表現したものであったと考えてよからう。神であるナマハゲは、村民の前に何処より姿を現わすと考えられているのだろうか。古いいつたえによれば、女木山の裏手の海岸に、大昔、異様な姿をした怪物が流れ着き、それが、村にやってきてあばれまわった。それを再現しているのが、いまのナマハゲであるとするものがある。この伝説においては、ナマハゲは、海岸に上陸し、そこから村へやってきたと伝えられているわけであるが、しかし、現実には、ナマハゲは、女木山からおりてくると信じられているのである。ナマハゲの示現場所をめぐる古伝説と村人の認識の相違には、極めて興味深いものがある。かつて、故和歌森太郎博士の指摘されたところであるが、このナマハゲ行事には、例えば、“悪魔払い”のような、中世修験道の影響が濃厚にうかがうことのできる要素がいくつかみられる。

いうまでもなく、修験道は、山岳信仰を基盤にしており、中世以降、日本の各地で、霊山信仰が簇生した。修験者が日本の庶民文化

に与えた影響には絶大なるものがある。もちろん修験以前においても、山岳を聖なる場所とし、そこに神々が棲むとする信仰あるいは山そのものを神体とみなす信仰は存在したわけであるが、これらを体系化したのが修験道であったといつてよい。

ところで、修験道による山岳信仰と、より古層に属すると思われる素朴な神体山の信仰の外に、今一つ、古代の日本人にとって基本的な信仰があった。それは海の彼方に楽土があり、そこに棲む、祖霊神が、時を限って村を訪ずれ、その年の豊穡を約束していくというものである。海の彼方の楽土がトコヨであり、時を限って訪問する神々がマレビトである。

ナマハゲの古伝説では、怪物が海上から村へあがったとされる。ところが現在では、ナマハゲは女木山から下りてくると信じられているのである。

マレビト信仰で代表される海から村への神示現のパターンを水平的とするならば、山から村へのパターンは垂直的といつてよい。

いついかなる事情の下で、ナマハゲの示現場所をめぐる認識の相違ができたものであろうか興味が残るところである。

筆者の想像が許されるならば、このナマハゲも本来は海の彼方よりやってくるものと信じられていたのではないだろうか。そして何時にか、それが女木山へあがり、女木山から村人の前に姿を現わすようになっていった。

ここに当時の修験道思想の介入があるように思われる。

ナマハゲ行事の例のように、当然、今は山からおりてくると考えられている神々のなかにも、古くは、海の彼方より、はるばる村里を訪れたものが多く含まれているように思える。日本の庶民文化の中で、神が海から山へとその示現場所を移動させたということは、如何なる意味をもつのか、共に考えていきたいところである。 <研究普及課>

山日記

千村勝哉

風が頬に心地好い5月の始め、雪が消え去った茶色の山肌に骨の髄まで染み入るような新緑が戻ってきた。

毎年きちんと繰り返される自然の科学さは承知していても、そのあまりの美しさには不思議としか言い得ようがない。自然を科学的に知る喜びと、理屈抜きに見たままを肌で感じる喜びとは別のものである。後者の方が自由で飛躍的で、夢があり、接する人々に現実生活を忘却させてくれる。

今年の飛び石連休は天候不順であったが、白峰から登山口「市の瀬」までの牛首川流域沿での雨あとの秀麗な新緑には、思わず車のハンドルさえ留守がちとなる。そんな雨上がりには、山腹の地が弛んでいるので道路の上方のガレ場等から落石があるかも知れない。それも、途中、誰とも遇わなかったりすると、美とのかかわりには、常に危険との背中合わせが必要なのかなと、ふと思ったりする。

この連休での白山室堂への登山者は約300余人と例年より少なかった。

私もそのあとの日本晴れ日和に室堂を目ざしてみた。登山口付近は、自肌のドロノキの若葉が谷風にあおられ、浅緑と白のモザイク模様。登るうち、ウグイス、ミソサザイの囀りが賑わしく、白花一番咲きのオオカメノキが得意がっている。

標高1,500mの「中飯場」から上は、まだ雪におおわれ、灌木も雪に押し倒されたまま。久しぶりの雪上登高は歩きづらく、かなりこたえる。視界がひとときわ開ける「甚の助ヒュッテ」で昼食。周辺のオオソラビソの林も雪の下だし、「ヒュッテ」もまだ3分の2は雪の下だから、明るい戸外で別山の雪肌を眺めながら頬張る。この時、上から二人の若いスキーヤーが勢いよく滑降して来た。よほど気持ち好いのだろう。白歯が目立つ雪焼けした笑顔で愛想よく、二言、三言、話しかけてくる。彼らと別れたあと、雪原の弥陀が原を經由し、室堂小屋に至る。日没までにはまだ間があるので頂上まで登ってみる。見下ろす紺屋が池や翠が池はまだ雪の蓋のまま。少し遠くでは、積雪で緩やかになった釈迦岳の起伏に、西日が柔らかい陰影を投げかけている。頂上あたりはカヤクグリ、イワヒバリの囀りが絶え間ない。イヌワシが1羽、上空を旋回している。室堂小屋主任の木下道雄氏の話によると、10cm足らずのヒメネズミを捕えたイヌワシは、その皮をペロッと尻尾まできれいに剥ぎ、内臓をとり出し、肉だけ持ち去るそうだ。残された内臓はテンなんか来て食べるという。

ところで今冬、室堂小屋のトタン屋根の一画がめくり上げられている。室堂員の話によると龍巻によるものだそうで、そういえば、小屋より200mほど東寄りの雪面に例年は見られないという、直径30~40mの円形の穴がえぐられている。龍巻によるものとは考えられないというが、改めてその力を想像すると凄じいことがわかる。げに恐ろしや。

スキーを折角担ぎ上げて来たので、翌日の帰りは雪の多い斜面を滑降してみたが、思わぬ所に巾30cm前後の小クレバスがかなりあり、最初は思わず動転して転倒してしまった。その転倒先が切り立った雪庇の縁だと気が付いた時などはいやはや。

人影が全く見当たらない、青空がバックの一面の残雪の世界に、めったになく脱下界していた私は、午後の仕事を思い出し、今年も山といろいろお付き合い出来そうだと思いながら、少し帰途を急いだ。

〈白山国立公園管理員事務所〉

自然公園指導員紹介

—山 田 健 治さん—

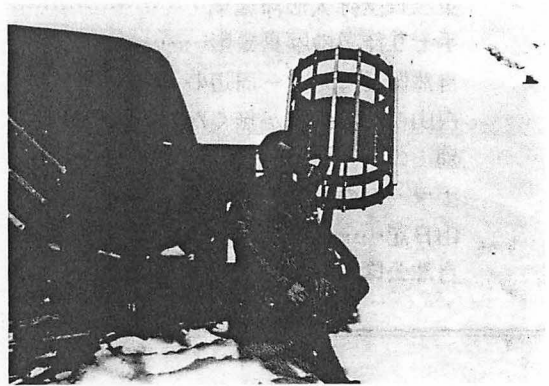
山田健治さんは白峰村役場にお勤めで、みんなからは「ヤマケンさん」と呼ばれ、親しまれています。役場に勤める前は、県のレインジャーとして2年間仕事をしておられ、その経験がもとで、昭和48年に自然公園指導員とされました。

まだ33才と若く、途中3年間程岩手県のほうへ竹細工(根曲り竹)の修業のため行っていた以外は、ずっと白峰村に住んでいる生粋の白峰っ子です。それで、地元白峰村での活動、消防団や民謡保存会等にはいつも積極的に参加しておられます。特に、全国的に有名な民俗芸能、かんこ踊りの伝承者として知られ、婦人会の方々にかんこ踊りの指導をなさっていると聞きます。

白山については、中学時代からボッカのアルバイトをしていたということで、自分の家の庭のように親しんでられました。その頃の白山は登山者も少なく、なにか神秘的な感じがあり、登山道で人に会うと懐しさがでてきて、自然に対話が生まれてきました。最近では、登山者は増えてきましたが、そのわりには昔のような対話は少なくなっていると、お感じのようです。山田さん自身、以前は登山者と同行する機会が多く、白山についての話や案内をしてられました。しかし、最近では仕事が忙しいため、一般の人といっしょに山に登ることが少なくなったのが、残念と言っておられます。

役場では、経済土木課観光係に属します。観光係といっても、冬は白峰村スキー場の管理、夏は南竜ヶ馬場の南竜山荘の運営と、山とは切っても切り離せない仕事です。夏になると、金沢はもとより関西、関東方面の山の愛好家たちから白山登山についての問い合わせが役場にきます。その対応のほとんどは山田さんがやり、白山登山のよきアドバイザーとして活躍しておられます。

観光係という職務の立場上からか、山田さんは最近観光という目で白山をみるが多くなりました。時々、白山の自然保護とうまくかみあわないことがあり、これらをどういうふうに調和させてゆくかということに、現在頭を悩ませておられるようでした。自然の保護と開発、一見相反するようにも思われますが、これらは共に人間生活には必要なもので、これらの調和を地元の発展という立場から考えてみたいと言っておられます。



(白峰村スキー場にて)

たより

始めのうちは雨も少なく、からつゆのような天候でしたが、最近になり、つゆもようやく本格的になり、各地に大雨を降らせているようです。7月もうすぐだというのに、蛇谷では雨の降る日などは冷えることがあり、つゆあけが待ちこがれます。

石川県の尾口村と岐阜県の白川村とを結ぶ白山林道（スーパー林道）が、今年の8月末には開通の見込みとのことです。林道の開通を機会に、センターでは白山林道をテーマにした特別展を計画しています。蛇谷の自然、林道の利用、緑化、自然に及ぼす影響等を取りあつかったもので、林道をいろいろな角度から見直してみたいと思っています。

表紙裏のグラビアでも紹介したように、手ぞりの写真撮影を、4月上旬、白峰村スキー場で行ないました。写真撮影は小松の写真家小林憲生氏にお願いしたもので、手ぞりの写真はかなり大きく（4.6 m×3.2 m）引き伸ばし、センターのホール正面の壁に展示します。山里の冬の生活の一端を紹介するのがこの展示の目的です。

4月17日には「春の植物」を、5月4日～5日には「白山ろくの自然と人々のくらし」をテーマに、センターの自然観察会を行ないました。多数の参加者を得、参加者には自然に親しんでもらえたものと、主催側は喜んでいるしだいです。ただ、観察会がたんに自然解説のみで終わっているのではないかと、昨今は反省しています。

夏の自然観察会は8月4～6日に開催する予定です。場所は白山頂上部を予定していますが、今回は日程を十分にとり、4日の晩は白山麓少年自然の家に宿泊して、白山の自然に関するレクチャーを行なうつもりでいます。細かい点については、新聞、ラジオ、テレビ等で後日お知らせします。

センターのホールに、はじめてツバメが巣を作りました。先日、直径1 cmぐらいの小さな卵のからが落ちていましたが、ひなが無事巣立つことが望まれます。

目 次

東二口文弥人形浄瑠璃	高桑 守	1
手ぞり作業の写真撮影		2
自然保護センター周辺のニホンカモシカ	桜井 道夫	3
白山の民話(7)首が無くなった観音様	石野 春夫	6
別山の「ニッコウイモリ」	宮崎 光二	8
ナマハゲのことども——海の信仰から山の信仰へ——	高桑 守	9
山日記	千村 勝哉	10
自然公園指導員——山田健治さん——		11

はくさん 第5巻 第1号

発行日 1977年6月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村中宮
印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂